地域づくり表彰

くどやま芸術祭実行委員会（和歌山県九度山町）

町がまるごと美術館に！

くどやま芸術祭
総合企画
大西（おおにし）　高志（たかし）



１．九度山町の概要

九度山町は、和歌山県の北東部に位置し、北には紀の川が悠然と流れ、南には霊峰高野山がそびえる自然豊かな町で、世界遺産や真田幸村ゆかりの史跡など歴史遺産にも恵まれています。

とくに、真田幸村が主人公の 2016 年大河ドラマ「真田丸」の放送により”真田ゆかりの地”として全国的にも知名度が上がり、真田昌幸・幸村・大助の真田三代の軌跡を紹介する九度山・真田ミュージアムは、現在もまちなかの観光拠点として賑わっています。

また、温暖な気候を利用した果樹栽培が盛んで、富有柿は日本一の品質を誇っています。



九度山・真田ミュージアム

２．活動開始の背景・経緯

2015 年、大河ドラマ放送決定を受けて、地元出身の日本画家・大西高志氏より真田幸村をテーマとした絵画「六文銭の覚悟」を町に寄贈されたことが始まりです。同年 10 月 10 日から 18 日にかけて、道の駅「柿の郷くどやま」において、大西高志展覧会「朱備え」を開催し、この展覧会中、大西高志氏から岡本章町長に九度山町で芸術祭をしたらおもしろいのでは？との提案がありました。

『本物をみてほしい！』という想いをもった二人が意気投合し、本町での芸術祭を企画するに至りました。二人の熱い想いが、町職員だけでなく、住民にも伝わり、町職員、住民有志、作家で組織する「くどやま芸術祭実行委員会」が発足。2016 年大河ドラマ「真田丸」の放送に合わせ、“町がまるごと美術館に”というキャッチコピーを掲げ「くどやま芸術祭 2016」を初開催いたしました。以降、2017 年、2018 年、2019 年と、歴史・文化および芸術と気軽に触れ合える「くどやまアートウィーク」を継続し、2021 年に 2 回目となる「くどやま芸術祭 2021」を開催。その後、本格的な芸術祭を継続開催するため、ビエンナーレ方式を取り、2 年後に「くどやま芸術祭 2023」を、本年「くどやま芸術祭 2025」を開催しました。



六文銭の覚悟・朱備え展

３．活動の内容

くどやま芸術祭は、昭和風情あふれるまちなかの空き家であったり、空き地、世界遺産に登録された寺社仏閣の境内であったり、いろいろな空間に現代アートを展示することで九度山の歴史文化と、そこに溶け込む芸術を楽しめるイベントです。

【作品の展示場所の確保】

まず必要なことは、作品の展示場所の確保です。九度山駅からまちなかエリア、道の駅、そして世界遺産エリアまで約 2㎞ 圏内に観光スポットが点在しており、来町者の多くは徒歩で散策して楽しまれます。

そのエリア内にある空き家や店舗のショーウインドウ、世界遺産の寺社仏などを展示会場に設定し、1 軒 1 軒交渉を行っていきます。もともと 4 月から 5 月のゴールデンウィークに開催されている住民有志によるイベント「町家の人形めぐり」がまちなかの空き家や店舗のショーウインドウを利用した形で行われていたため、後発のイベントでありながらも多くの展示場所を確保することができました。



エリアマップ

【作品展示の会場づくり】

くどやま芸術祭の魅力の一つは、作家の世界観を壊さず、そこにある建物と一体化した作品展示です。所有者と協議し、地域住民とともに準備を進めていきます。作家の作品であると同時に地域住民とともに創り上げる作品でもあり、九度山でしか見ることができない唯一無二の作品になっています。この制作において、キーパーソンになるのが、実行委員です。町内作家であったり、水道屋であったり、電気屋であったり、土建屋であったり、実行委員は、作家と地域住民をつなぐパイプ役となり、作家の要望を実現する大道具スタッフのような役割を担います。作家から提出された展示計画に沿って、それぞれが各々の仕事で培った技術をフル活用しながら、展示会場の掃除はもちろん、希望される展示台や仕切り壁を制作したり、照明を設置したり、展示作品の魅力を最大限引き出せるよう、準備を行います。展示

会場の一つ一つが作家と実行委員、それに地域住民との共同作品といえます。ともに考え、ともに創るからこそ、九度山オリジナルの素晴らしい作品ができあがります。それが地域に受け入れられる大きな要素となっています。この作業をすべての展示会場で行います。



展示会場づくり

4．創意工夫

【伝統文化と芸術の融合】

世界遺産をフィールドに作品展示ができることは、作家にとっても非常に貴重な体験となっています。世界遺産に登録された寺社仏閣やそこにある作品をライトアップしたり、世界遺産慈尊院のシンボル「多宝塔」を背景に音楽コンサートを開催したり、文化財の新たな活用方法を生み出すとともに、若年層が世界遺産を訪れるきっかけにもなっています。



世界遺産での展示

【地域の魅力再発見】

シャッターや外壁へ直書きするライブイベントにより、年々町を彩る作品が増え、会期以外にも芸術が楽しめるようになってきています。商店街に点在する現代アートを通じて、当たり前すぎて気づかない町の魅力を再発見する機会になっていると考えます。昭和風情漂う建物に対し、ただ古いという認識ではなく、そこに刻まれた歴史を感じ、後世に引き継いでいかなければならないものという新たな価値創造にもつながっています。



まちなかﾗｲﾌﾞｲﾍﾞﾝﾄﾌｪｽﾀ

【子どもたちに郷土愛を】

以前から小学生や中学生を対象とした風景画の絵画展「九度山百景絵画展」を開催していましたが、くどやま芸術祭と併催することで、あらためて芸術の魅力、地元の魅力を再認識する相乗効果がみられます。また、ワークショップを通じた作家との交流により、これからの九度山を担う子どもたちに芸術の素晴らしさを感じてもらう“場”を創出しています。今年開催した「くどやま芸術祭 2025」では、小中学生の時から芸術祭に関わり、芸術家を志した子どもさんが成長し、町内作家の一人として作品を出展してくました。



大人になり町内作家として出展

5．成果

【他団体との交流】

2021 年「六甲ミーツアーツ」や「BIWAKO ビエンナーレ」から視察がありました。関西を代表する芸術イベントに興味を持っていいただいたことは大いに自信となりました。

また、2023 年には、「奈良・町家の芸術祭はならぁーと」や「亀山トリエンナーレ」から視察がありました。亀山トリエンナーレへは当会からも視察に訪れ、会場設定や地元商店街における限定商品の販売など、九度山では取り組むことができていない事例を学び、今後の芸術祭を考える良い機会となりました。また、亀山トリエンナーレに出展した作家がくどやま芸術祭にも出展いただくなど交流の幅も広がってきています。

【経済効果】

前回（2023 年）の芸術祭は、周知広報を強化した結果、数多くのメディアにも取り上げられました。地元テレビやラジオだけでなく、NHK「日曜美術館アートシーン」へ取り上げられた意味は非常に大きく、一躍全国区にブランド化が進んだように思われます。その経済波及効果も、13,800 万円と算出されました。（和歌山社会経済研究所による試算）

当初は、戸惑いを見せていた地域住民も、「今年は開催するの？」「また会場として活用してよ。」「うちのシャッターにも絵を描いてほしい。」などと話されるようになり、”芸術”が着実に地域に根付いてきています。

【交流人口増加の一役】

出展した作家が地域住民と交流を深め、九度山ファンになり、九度山へ家族とともに移住してくるなど、関係人口の増加はもとより移住定住へと波及効果が見られます。

6．今後の展望

『本物をみてほしい！』という二人の想いから始まった芸術祭は、実行委員・地域住民・作家・その他の芸術関係団体との交流の中で、本町を代表するイベントに成長しています。今後、さらにクオリティを上げ、『作家の登竜門は、くどやま芸術祭への出展』と認知されるよう、芸術の町「九度山町」を目指します。

ゴールは、”芸術の産業化”です。この芸術をテーマにした活動の輪は、ふるさとを想う心を育むと同時に、関係人口の増加、移住定住の促進をもたらし、地域課題を解決する一つの手段になり得ると考えます。

九度山町の明るい未来を紡ぐ事業として、引き続き頑張っていきます。



実行委員の皆さん